科目コード	34351	科目名	保育内容総論	単位	1

次の設題について、1,500字程度でレポートを作成してください。

設　題　1

「保育所保育指針」（平成29年改定）の８つのポイントの重要な視点・強調された点等を解説してください。さらに、「非認知能力」について子どもの遊びや活動の具体例をあげて説明し、保育者として意識しておかなければならないことを述べて下さい。

― 作成の手引き ―

1．設題をよく読み、何についてまとめるのかを理解しましょう。

2．「保育所保育指針」（平成29年改定）の８つのポイントを理解しましょう。
　本学テキストは、簡潔に記載されているところもあります（p33～36）。詳細は、テキストの関係ある章を熟読下さい。「保育所保育指針解説」序章 p2～9も合わせて学習し、まとめましょう。

3．非認知能力はテキスト p34、p54を参照し、非認知能力を高める保育が求められていることを理解しましょう。

4．非認知能力を高めるのに最も重要な時期は乳幼児期であることを説明しましょう。
　特に幼児期は、認知能力と非認知能力が絡み合って伸びます。子どもの興味・関心、意欲などを大事にする遊びは非認知能力を育てるだけでなく、知的好奇心の育ち、つまり、認知能力にもつながります。非認知能力を育むことで「知る」という認知能力も伸びていくのです。読み・書き・計算などの認知能力だけに重点を置いても、効果が高まりづらいことに十分な注意が必要です。

5．非認知能力を、具体的な子どもの遊ぶ姿を取りあげて説明してください。
　園では、育みたい３つの資質・能力の中の「学びに向かう力、人間性等」を育てることを重視しています。しかし、３つの資質・能力は個別に取り出して指導するのではなく、遊びを通しての総合的な指導の中で一体的に育むものです。これは、遊びを充実させることが一番の方法といえます。非認知能力について、子どもの遊びや活動の具体例をあげて解説してください。

6．５で述べた具体例から、保育者が意識しておくべき大切なことをいくつか述べてください。

7．保育図書や幼稚園教育要領解説、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説等も学びましょう。

8．参考文献
・本学テキスト以外に図書を１冊以上取り上げてください。
・著者名・タイトル・出版年・出版社等を記載してください（下記「参考書」参照）。
・インターネット検索は、１～２つは認めます。サイトのタイトル・URL・検索年月日を明記してください。

9．常体「である調」で、書き言葉を意識してください。

10．レポートは、誤字・脱字・変換ミスがないように読み返し、改行や句読点の位置なども意識してください。

参　考　書

・栗岡あけみ、宿南久美子、和田真由美、位田かづ代　『保育内容総論』平成31年　豊岡短期大学通信教育部
・厚生労働省『保育所保育指針解説』平成30年　フレーベル館
・文部科学省『幼稚園教育要領解説』平成30年　フレーベル館
・内閣府･文部科学省･厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』平成30年　フレーベル館
・無藤　隆、汐見稔幸『イラストで読む! 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領はやわかり BOOK』2017年　学陽書房
・佐々木晃『０～５歳児の非認知的能力 事例でわかる! 社会情動的スキルを育む保育』2021年　池田書店
・大豆生田啓友、大豆生田千夏　『非認知能力を育てる　あそびのレシピ』2019年　講談社
・横山洋子『０～５歳児 非認知能力が育つこれからの保育』2021年　池田書店
・『発達170号　非認知能力の発達と保育・教育』2022年　ミネルヴァ書房

【学習の目的・ねらい】

「認知能力」とは知的な力で、「非認知能力」は、情意的な力とか人と協働する力です。３つの資質・能力でいうと、「知識及び技能の基礎」は「気付くこと」ですが、それは知的な力の一面です。もう一面は「思考力等」で、考えること・工夫することで、知的な力の中心です。非認知能力は３番目の「学びに向かう力・人間性等」で、「心情・意欲・態度」の育ちから生まれることから、情意的な部分となります。「心情」は気持ちや感情で心が動かされること、「意欲」はやりたいと思うこと、「態度」は粘り強くできるといったことを指しています。粘り強く最後まで取り組む、難しいことにも挑戦してみる、みんなで一緒に考えていくということを「態度」といい、これらは「学びに向かう力」になります。

人間関係は段階的で、ベースとして愛着がまず先にあり、その次に１～２歳児を見ていくと友だちとの仲良し関係が始まり、３歳以降に集団的な取り組みや共同的活動が始まるという３段階になっています。特に幼児期（満４歳～５歳）に顕著な発達がみられ、個人差・気質差はありますが、学童期・思春期に伸びていきます。

乳幼児期に非認知能力を育むことが、成長後の心の健全さや幸福感を高め、社会的・経済的効果を高めると考えられます。つまり、就学前教育を受けた子どもたちが獲得した能力の中で、長期的に持続したのが「非認知能力」で、それこそが将来の成功につながる重要な能力だということです。

自分を動機づけて高めようとしたり、自分の感情をコントロールしたりしながら、自分と他者を大切にできる非認知能力の育成が、変化の激しい社会のなかで求められているのです。

【学習の進め方】

１．本学テキストを最後まで熟読し、第2章の保育内容の歴史的変遷を学びましょう。そして、現在に至るまでの「保育所保育指針」の改定の趣旨を理解しましょう。
２．保育所保育指針の８つのポイントとは何か、テキストとともに保育所保育指針解説書もあわせて理解ください。
３．園では非認知能力（学びに向かう力、人間性等）を育てることを重視しています。非認知能力を高めるのに重要な時期は、乳幼児期であることを理解しましょう。
４．３つの資質・能力は、遊びを通しての総合的な指導の中で一体的に育むものです。非認知能力とは何か、具体的な子どもの遊ぶ姿を取りあげて説明してください。
５．具体例から、保育者が意識しておくべき大切なことをいくつか述べて下さい。これらの記述にあたっては自分の考えも含めて述べてください。

【学習のポイント等】

・学習にあたり、平成30年頃までの時代背景を念頭に置いて取り組むことを勧めます。
・非認知能力は、より具体的には、何かに熱中・集中して取り組む姿勢、自分の気持ちをコントロールできること、他者と上手くコミュニケーションできること、自分を大事に思えること、といった力です。乳幼児期にこうした非認知能力を育むことが、その成果は、その時すぐにではなく、あとになって出てくることから「あと伸びする力」とも言われます。
・保育者は、将来のために非認知能力を育てることを考えるのではなく、子ども時代の現在の毎日が満たされるために子どもに向き合うことが大事です。非認知能力が育まれた子どもたちは、その結果、子ども時代の「現在の幸せ」が、その後の幸福感に繋がっていく可能性があるのです。